



No. 36

1993年9月発行

新潟県支部報

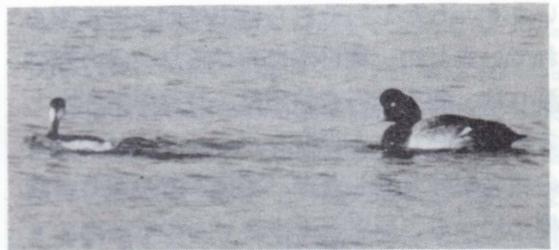
マイ スコープ

コスズガモの観察

上越市 古川 弘

1993年1月1日新年の探鳥会と、いつものコースに出発する。夕方立寄った直江津港で変なカモを見つける。キンクロハジロとスズガモの交雑？カモは交雑が多く変な個体が多いからと勝手に納得しその日は帰宅する。夜ノートを整理しながら何か変なカモの事が頭の中にいっぱいになる。明日までいればと図鑑、写真集等目を通すがこれという物は無し。頭の形で選べばクビワキンクロかコスズガモ ???...

2日晴、直江津港に出発する。いました昨日と同じような場所に。嘴のパターンでまずクビワキンクロではなさそう、そうすればコ



ハジロカイツブリとコスズガモ

たき、その一瞬の事とてもよく見えるなんてものでは有りません。2回目、3回目うっすら頭の中に見えてきました。又時々頭部に当たる光の具合で薄い紫色に光る時があります(スズガモ雄の頭部は緑色に光ります)。嬉しい事に人間嫌いでないようで5m位の近さで観察する事が出来るように成り、ほとんど黒く見えていた全体の色も、頭部、首、背中と微妙な色の違いが見えてきます。コスズガモの雄のエクリプスだろうと決めたのは観察を始めて3時間も経過していました。



はばたく
コスズガモ

スズガモ。それにしても頭の形だけで他にはこれと決め手なし、次のチェックポイント翼のパターンでも休息、羽づくろいと一向に翼を開いてくれない。瞳は黒、虹彩は黄色、足は灰色と次々とチェックしていくがどうも決め手無し。待つ事2時間やっと1回目のはば

1月1日の発見、2月23日に他へ移動。再び4月20日から4月25日までの期間でエクリプスから繁殖羽への変化を観察する事が出来ました。又色々な行動を見ることが出来たのですが、勉強不足の為スズガモの観察をしっかりとしていないので細かな比較等の報告は今回出来ませんが、納得のいく報告の出来る日がきましたら新潟県初記録のコスズガモとスズガモの比較の報告をしたいと思います。

はじめに

日本におけるワシタカ類の渡りは、秋期を中心として、愛知県の伊良湖岬、愛媛県の佐多岬、沖縄県でのサシバを中心とした渡りや広島県におけるハチクマを中心とした渡り、長崎県のアカハラダカの渡りなどが知られています。しかし、それらは主に西日本に限られていました。東日本におけるワシタカ類の渡りは、関東地方や秋田県、青森県で主として数十羽のレベルのサシバやハチクマの渡りの報告がありましたが、西日本での渡りの規模に比べるといずれも小さいものでした。

しかし、1989年になって長野県奈川村白樺峠でサシバ、ハチクマを中心とした渡りが観察され、1991年、1992年の秋に「信州ワシタカ類渡り調査研究グループ」によって長野県内での調査が行われました。その調査結果によると、1991年秋には白樺峠で3838羽のサシバ、1398羽のハチクマが、1992年秋には6976羽のサシバ、2118羽のハチクマの渡りが観察されているほか、ツミ、ハイタカ、ノスリ、オオタカなどの渡りも観察されています（信州ワシタカ類研究グループ、1992、1993）。隣県である長野県でこのような大規模なワシタカ類の渡りが観察されていることから、新潟県を含む東日本でも大規模なワシタカ類の渡りのルートが存在する事が考えられます。

新潟県における渡り

1. 牧 峠

上越市の古川弘氏は、1987年から東頸城郡牧村の牧峠で観察を続けていられます。そ

の観察記録を表-1.2に示させてもらいました。それによると、年によって差はあるようですが、おおむね1シーズンに数百羽のサシバ、ハチクマを中心とした渡りが見られるようです。牧峠は長野県境に位置しているため、白樺峠などとの関連性が十分に考えられます。しかし、今のところ長野県へと続く渡りのルートは良く分かっていません。

2. 小村峠

牧峠につながるワシタカ類の渡りのルートを求めて、私は柏崎市と柿崎町の境にあり、以前ハチクマの小規模な渡りが観察された小村峠で、1992年の秋に定点観察を行ないました。その結果を表-3に示します。9月22日にサシバ271羽、ハチクマ54羽の渡り

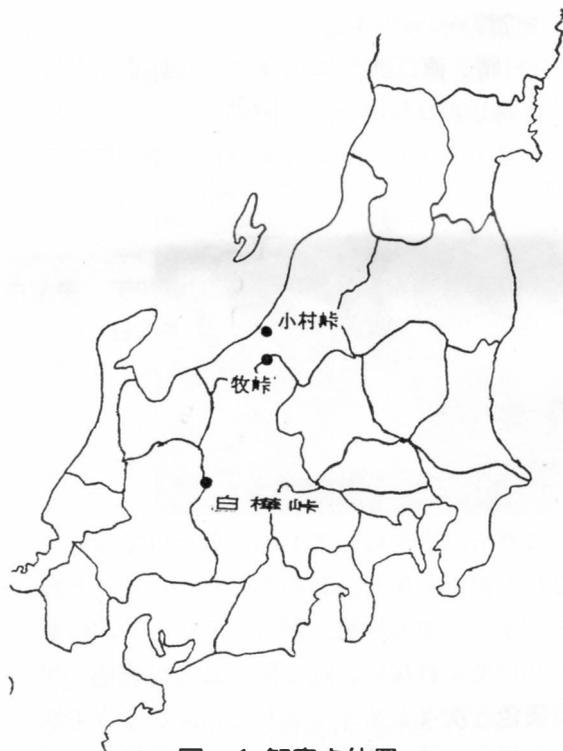


図-1 観察点位置

表-1 牧峠ワシタカの渡り (1987~1991) 古川 弘 氏のデータより

1987. 9. 21	サシバ99, ハチクマ44
9. 27	サシバ162, ハチクマ20, チョウゲンボウ1
1988. 9. 4	サシバ1
9. 14	サシバ16, ハチクマ2, ハイタカ1
9. 18	サシバ100+, ハチクマ15
1989. 9. 17	サシバ140+, ハチクマ40+, ハイタカ1
9. 21	サシバ114, ハチクマ67, ハイタカ2
9. 24	サシバ285+, ハチクマ143+, ハイタカ2 ノスリ1, ミサゴ1, チゴハヤブサ1
1990. 9. 9	サシバ12, ハチクマ13
9. 16	サシバ10, ハチクマ50, ハイタカ1
9. 18	サシバ1, ハチクマ74
9. 24	ハチクマ12, オオタカ1, ハヤブサ2
9. 27	大型不明250+, オオタカ1
10. 2	ハチクマ1, ハイタカ1
10. 13	サシバ1, ハチクマ1, オオタカ1, ツミ3 ハイタカ7, チゴハヤブサ2
10. 21	サシバ1, ハイタカ1, ノスリ3, チゴハヤブサ1
1991. 9. 15	サシバ1, ハチクマ6
9. 16	サシバ2, ハチクマ10
9. 17	サシバ1, ハチクマ1
9. 24	ハチクマ9
9. 25	サシバ3
9. 27	サシバ1
9. 29	サシバ16, ハチクマ13, ハイタカ5
10. 3	サシバ5
10. 4	サシバ1, オオタカ1
10. 10	ツミ2, ノスリ2
10. 18	ハチクマ2, ツミ4, ハイタカ2, ノスリ8 チゴハヤブサ2
10. 20	ノスリ1
10. 21	ハイタカ1, ノスリ1
10. 30	ハイタカ4, ノスリ16
11. 2	ハチクマ1, ハイタカ2, ノスリ35
11. 3	ハイタカ1, ノスリ6, ハイイロチュウヒ1
11. 6	サシバ1, オオタカ1, ハイタカ9, ノスリ193

注 大型不明とは、サシバとハチクマの識別ができなかった個体
 小型不明とは、ツミとハイタカの識別ができなかった個体

表-2 牧峠ワシタカの渡り (1992) 古川 弘 氏のデータより

1992. 8. 23	サシバ5
8. 30	サシバ3
9. 6	サシバ1, ハチクマ5
9. 7	サシバ1, ハチクマ6
9. 8	ハチクマ2, 大型不明1
9. 9	サシバ4
9. 13	ハチクマ6, ハイタカ1, ツミ1
9. 15	サシバ42, ハチクマ127, 大型不明1 ハイタカ1, ノスリ1
9. 17	サシバ2, ハチクマ5, オオタカ1,
9. 18	ハチクマ1
9. 19	サシバ34, ハチクマ105
9. 20	サシバ16, ハチクマ64, ハイタカ1 チゴハヤブサ1
9. 21	サシバ2, ハチクマ2, 大型不明1
9. 22	サシバ3, ハチクマ27,
9. 23	ハチクマ7, ハイタカ1, ハヤブサ1
9. 27	サシバ9, ハチクマ48, オオタカ1, ハイタカ5 ハヤブサ1
9. 28	ハチクマ2
10. 1	サシバ47, ハチクマ30, ハイタカ1 チゴハヤブサ2
10. 3	サシバ2, ハチクマ7, 大型不明1, ハイタカ1 チョウゲンボウ1
10. 4	ハイタカ1, ノスリ1
10. 7	ハイタカ2
10. 11	ハチクマ2, ツミ2, ハイタカ9, ノスリ43 チゴハヤブサ2
10. 17	ノスリ3
10. 18	ノスリ95

計	サシバ171, ハチクマ446, 大型不明4, オオタカ2, ツミ3 ハイタカ23, ノスリ143, ハヤブサ2, チゴハヤブサ5 チョウゲンボウ1
---	--

が見られました。全体的に牧峠に比べると小規模ですが、様々な種類のワシタカ類が見られました。図-3.4にサシバ、ハチクマそれぞれに2地点を比較してみました。昨年に

定点で渡りを観察すると、サシバ、ハチクマの他に、ツミ、ハイタカ、チゴハヤブサなど普段あまり目にする事のないワシタカ類を初めとして、ツバメ類やヒタキ類などの小鳥

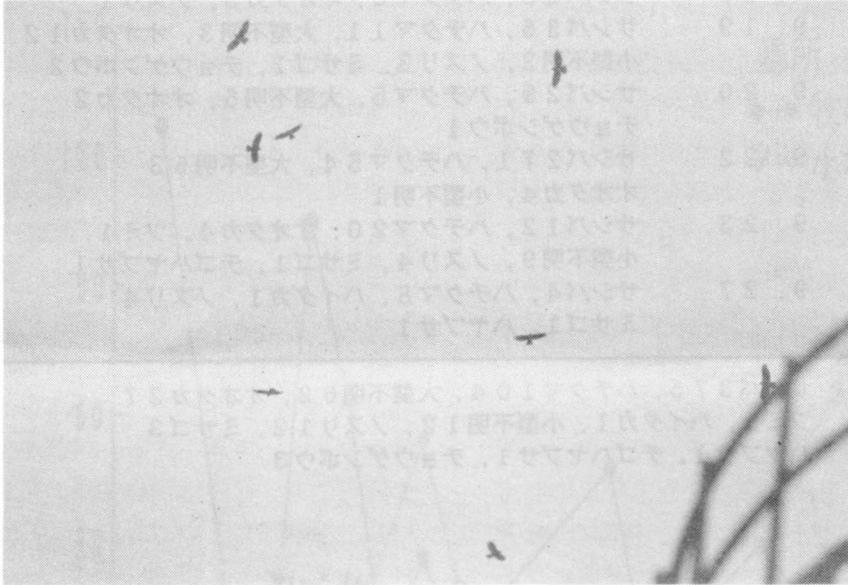


図-2
小村峠における
ハチクマの渡り

関しては、小村峠から牧峠へと向かうルートは考えられないようです。新潟県内にも複数の渡りのルートがあることを示しているようです。

調査の意義およびこれからの 調査について

ワシタカ類は、小鳥類に比べれば大きく、上昇気流に乗って、高い高度を渡っていくため、渡りを観察しやすいのが特徴です。また、ヒヨドリなどに比べれば数が少なく、飛翔型から種の識別も可能です。もし、県内各地で定点調査を行ない、その数を数えられればその意義は大きいと思われます。第1に、まだわかっていない県内の渡りのルートを明らかにすることで、その地域の保全を図れること。第2に各地で数を数えることで、それぞれの地域でのワシタカ類の総数がある程度推定できること。第3に県内各地の情報を交換することで、県内の会員の方々の交流が図れるということなどがあげられます。また、

類の渡りの様子も見るができます。

このようなワシタカ類の渡りを見ることが出来る場所としては、平野から山へと勾配が急に変わり、上昇気流が発生しやすい所や渡りの方向に直角（北西から南東方向）に連なる山域の峠などが考えられます。ただし、ワシタカ類の渡りは今までの観察から、そのルートにかなりの幅があると思われるので、見通しのよい場所を選んだ方が観察できる可能性は高いと思います。牧峠や小村峠の他にワシタカ類の渡りが見られた地点として私が聞いているのは、妙高高原町池の平、小千谷市山本山、長岡市の東山丘陵などです。今後は、これらの地点を中心に、さらに観察地点を増やして、新潟県内のワシタカ類の渡りルートを解明できればと私は思っています。そこで今年は9月中旬から10月上旬にかけて県内各地でワシタカ渡りを観察して下さる会員の方がいれば、以下の点について私に情報を提供して下さいれば幸いです。1.場所。2.月日と時刻。3.ワシタカの種類と数。4.天候。5.渡りの方向などです。

表-3 小村峠ワシタカの渡り (1992)

1992. 9. 15	サシバ23, ハチクマ6, オオタカ5, ノスリ1
9. 19	サシバ36, ハチクマ11, 大型不明3, オオタカ12 小型不明2, ノスリ3, ミサゴ1, チョウゲンボウ2
9. 20	サシバ29, ハチクマ5, 大型不明6, オオタカ2 チョウゲンボウ1
9. 22	サシバ271, ハチクマ54, 大型不明53 オオタカ4, 小型不明1
9. 23	サシバ12, ハチクマ20, オオタカ4, ツミ1 小型不明9, ノスリ4, ミサゴ1, チゴハヤブサ1
9. 27	サシバ4, ハチクマ8, ハイタカ1, ノスリ4 ミサゴ1, ハヤブサ1
計	サシバ375, ハチクマ104, 大型不明62, オオタカ27 ツミ1, ハイタカ1, 小型不明12, ノスリ12, ミサゴ3 ハヤブサ1, チゴハヤブサ1, チョウゲンボウ3

サシバ

個体数

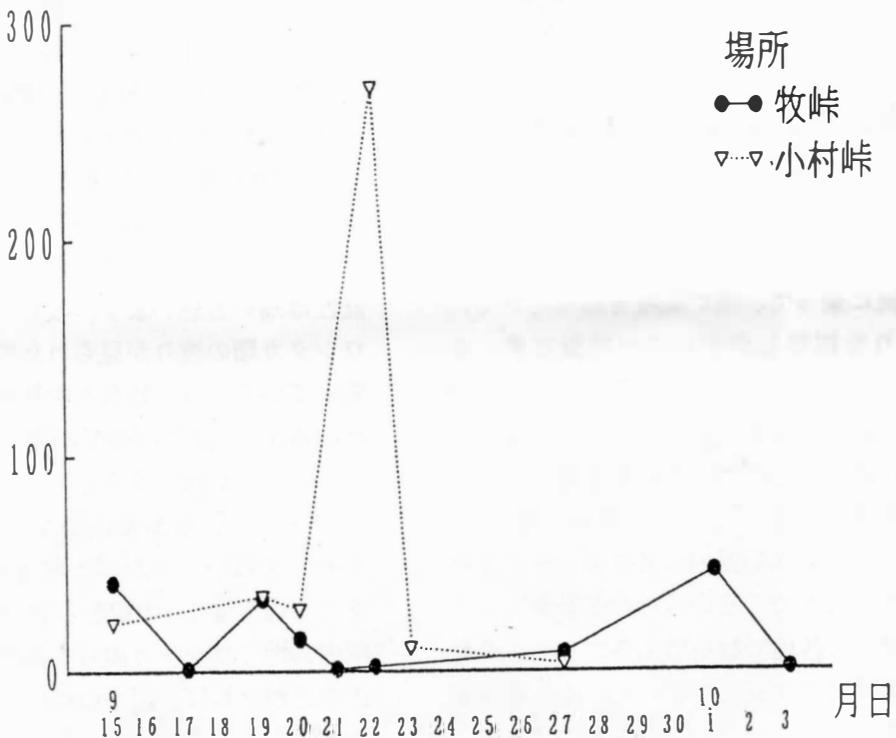


図-3 牧峠と小村峠におけるサシバの移動数の比較

ハチクマ

個体数

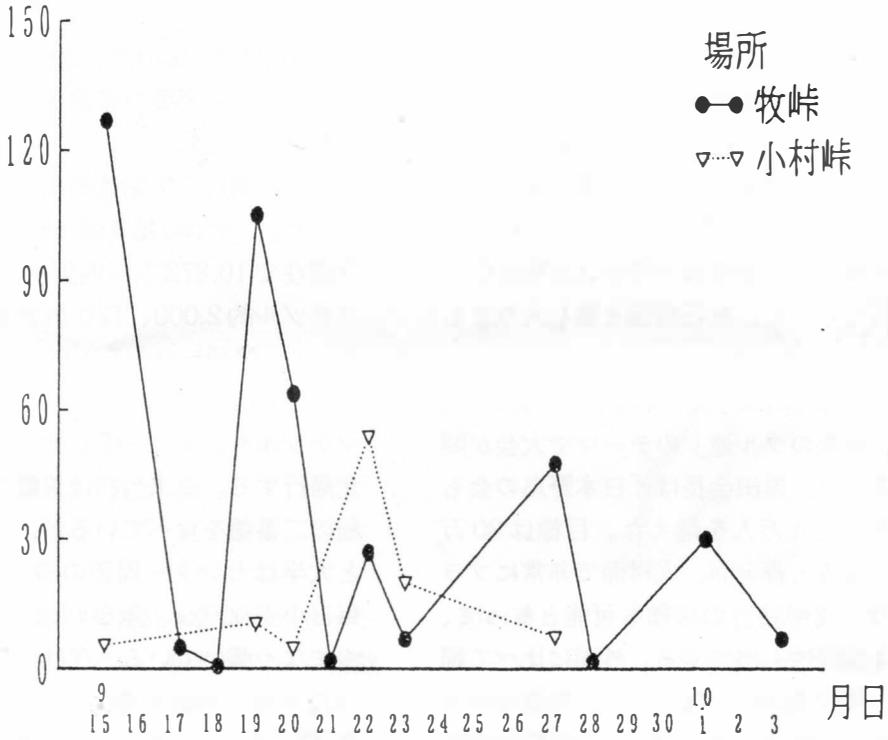


図-4 牧峠と小村峠におけるハチクマの移動数の比較

なお、今年は多くの方にワシタカ類の渡りを見もらうため、県支部にお願いして牧峠で9月23日に探鳥会を計画させてもらっています。これを機会にワシタカ類の渡りにたくさんの方々が興味をもってもらえればと思います。



小村峠より八石山を望む

御協力をお願いします

連絡先 〒947 小千谷市土川1-19-24
 小川アパート1号室
 末崎 朗
 TEL 0258-82-0350

第38回出水全国大会に参加して

尾身 秀雄

1月15日・16日、鹿児島県出水市で開かれた全国大会に渡辺範雄氏と参加しました。鹿児島空港からバスで出水の会場に着いたときには、まさしく島津雨（大事な客が来ると雨が降るといふ島津の謂れ）に迎えられました。道々車中から緋寒桜や梅が3分咲き位に眺められたりして、流石南国と感じ入りました。

15日は参加者150人、14時から「見よう、知ろう、出水のツル達」のテーマで大会が開始されました。黒田会長は「日本野鳥の会も会員がやっと4万人を越えた。目標は30万人、そうなる資金面、人材面で非常にプラスとなり、支部独自の活動も可能となって、文化的な多様性も出てくる。外国に比べて婦人会員、年少会員が少ないので、今後その方面に力を入れたい」という主旨の挨拶がありました。下池和善支部長からは、第3回中国ツル視察団が1月14日から来日していること。1985年出水で開かれた第1回ツルシンポジウムで、黒田会長が三つの力——地

元・自治団体・国の力、調査（科学）の力、財政の力——の必要を強調されたことなどの紹介がありました。

初めに溝口文男副支部長の基調報告がありました。「今年の越冬個体数は92年12月20日現在で10,372羽（内訳ナベヅル約8,000、マナヅル約2,000、残りがアネハヅル、カナダヅル、雑種）である。12月中旬に最大となり、1月中はほぼ横ばい、2月中・下旬にかけてマナヅルが、3月一杯でナベヅルがそれぞれ北帰行する。飛来当初は荒崎の干拓地周辺で稲の二番穂を食べているが、それがなくなると大半はセンター周辺の借上地に来ている。毎日小麦900kg、魚600kgを50haの田圃にくまなく蒔いている。夜は荒崎地区の水を張った水田1.5haが塹となる。ナベヅルは湿地・畑の両方、マナヅルは湿地だけにおり、餌は植物の根、稲作の二番穂、タニシや蛙、小麦・魚など人工肥料である。」

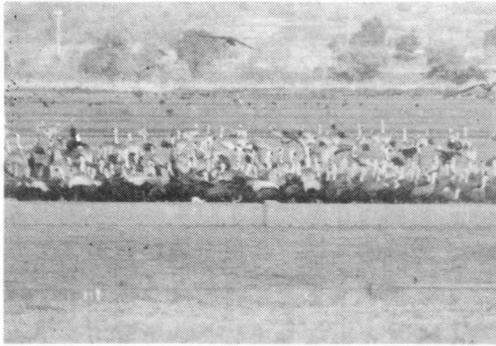
中国視察団からも中国黄河デルタ管理センターについて、「タンチョウ、アネハヅル、ナ



中央の農道にまかれた
餌を奥から啄んで
くるツルの群れ

ベヅル、マナヅル、カナダヅルの5種が確認されている。希少種のカモメ類を保護したい。黄河デルタは毎年2,500ha ずつ広がっている。」という紹介がありました。

本部塚本洋三専務理事からツル保護の問題



マナヅルの群

点の報告が次のようにありました。「第一は農作物の被害で、本会でも76年～78年にかけて被害調査をしている。第二は越冬地の借上代で現在反当たり3万円で50ha 借り上げており、その借上料は国と県・地元市町村が半分ずつ負担しており、本会でも100万円を出水市に提供している。第三は土地買い上げで、現在罫として1.5ha 買い上げているが、できればこれの4倍は欲しい。第四は越冬地分散化対策で、越冬個体数が万羽を数えるようになると、集団伝染病の危険性が高まり、その緊急性が増してきた。以上四つは多年その対策に取り組んできたがなかなか解決困難だ」ということでした。

シンポジウムは、塚本、溝口両氏の他に下池支部長、又野末春ツル観察センター監視員が加わり、本部市田常務理事の司会で行われました。要約すると「ツルとの共生が必要であり、出水の問題が解決できれば他の問題は全て解決できるだろう。鶴の越冬地50haは全部国が買い上げて欲しい。現在地での越冬は生物学的には限界に来ている。」という内容でありました。席上勝野理紀氏(愛知県会員)から100万円の保護基金寄付の紹介があり、これを本年度バードソンの第1号とし

て、出水のツルのためにバードソンで募金をするよう、支部評議員会にはかりたいと市田常務理事から報告がありました。

記念撮影の後、夕食パーティー、オークションがあり、名物鹿兒島いも焼酎の差し入れもあり大変盛り上がりしました。19時30分から「出水のツル」「ツルの保護を考える」「焼酎(鹿兒島の特産物)をめぐって」の三分科会がもたれました。私と渡辺氏は「出水のツル」分科会に出席、93年度会員証となった吉尾直善氏のスライドを見ながらのお話には、ツルの愛情にも触れてほろりとさせられる場面もありました。

16日はいよいよエクスカッションです。この日は雨こそないが、気温は今冬一番に下がって強風も伴い、鹿兒島でも山は雪だということでした。8時半から約1時間、観察センターでのウォッチング。センターから4m幅の農道が水田の奥に向かって伸びており、そこに一筋に小麦の餌が蒔かれます。それを奥の方からツルの大群が無心に餌を啄みながら、だんだんにセンターの方に近づいてくるのを見るのはまことに壮観でした。集団の前方にナベヅル、後方にマナヅルと続きますが、それだけマナヅルの方が警戒心が強いのだそうです。この農道を中心として周辺の水田に大群が分散しているわけですが、この中に5羽のカナダヅルがいるということで、地元の会員から探してもらって3羽まで確認できました。また、中ほどに田圃が2枚ほどツル達の水浴びなどの遊び場として水を張ってありますが、そこにマガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、コガモなどのカモ類もたくさんいて、その中に3羽のツクシガモを見ることができました。風が強く、プロミナがゆれると画面も落ち着かず、またツル程大きくないので、全体が白っぽい中で胸部から背にかけての栗色が辛うじて判別できるかという程度で満足しなければなりません。この給餌場一帯にはかなりのカラスが集まっており、空に

はワシタカの仲間が2,3羽舞っていました。

ここからバスで荒崎の東干拓地に移動して、3~4羽単位のツルのファミリー行動の観察をしました。ツルは警戒心が強いので余り近寄らないようにという注意を受けました。ツルまではかなりの距離があり、望遠レンズで写真を撮りに来ている人もいます。麦島にツグミやヒバリなどの小鳥もいます。タゲリが立ち止まっているのをしばらく見ていま



マナヅルのファミリー

たが、あのメタリックな光沢が何とも美しい。ツル達はファミリー単位で見られるのだが、それにしても距離があり過ぎる。干拓地で海に近く、風も一向におさまらず、私はアノラックのフードを被って寒さを凌いでいましたが、黒田会長は帽子も被らずに、オーバーコートの襟を立てただけで、この広い干拓地を歩かれているのが印象的でした。結局寒いこともあって、予定より一時間も早くバスに引き上げて、早々と昼食を済ませました。観察センターでもっとゆっくりすべきではなかったかという声も聞かれましたが、センター周辺での万羽の大群の行動と、そこを離れての親子仲睦まじいファミリー単位の行動を比較観察できたことでよしとすべきかと納得しました。なお、ツル達のファミリー行動はエクスカージョンで移動中も随所で見られ、2月頃ともなると農家の軒先まできて餌探しをする光景もみられるそうです。公式のエクスカージョンはこれで全て終り、12時10分出水駅前解散となりました。

福島県境で見た！アカショウビン

総会・探鳥会報告 事務局

85年、90年に続き、今年も下越での総会・探鳥会は東蒲・上川村の「みかぐら荘」とその周辺で行なわれました。

総会では各事業報告、決算報告、また本年の事業案、予算案が提案されました。その後、5年後に支部創立20年を迎える為に、20周年記念として何かやったらどうかと言う案が出て、会員の方々からそれぞれ意見が出ましたが、最終的には、会員全員からアンケートをとり、それをもとに幹事会、総会等で検討していくことになりました。まだアンケートを出していない方も、〆切は過ぎていますが是非お出し下さい。また会費についても10年以上同じ会費でやっている為、値上げを検討したいと言う提案が事務局からありました。20周年と共に会員にアンケートという形で様々な意見を聞いて検討する事になりましたので、ご協力お願いします。また夜の研修会でも、渡辺通氏より翌日の探鳥地の鳥類相について、研究部のモニタリング調査について小池重人氏より、最後にワシタカ類の生態写真を佐藤吟一氏より発表がありました。

さて翌日の月山の探鳥会ですが、あいにくの雨で声はすれども姿は見えずといった感じで、オオルリやサンコウチョウ、ゴジュウカラ、ホトトギス、イカル、クロツグミ、キビタキ等けっこう聞えたのですが、姿は見えず初心者には少し大変だったかも知れません。一応解散後、福島県境、日尊の倉岳のブナ林へ有志（ほとんど全員でしたが）で行く事になりました。まだ雪の残る県境を見た後、コルリの声を聞き、アカショウビンの番まで観察でき、一同感激もひとしおでした。

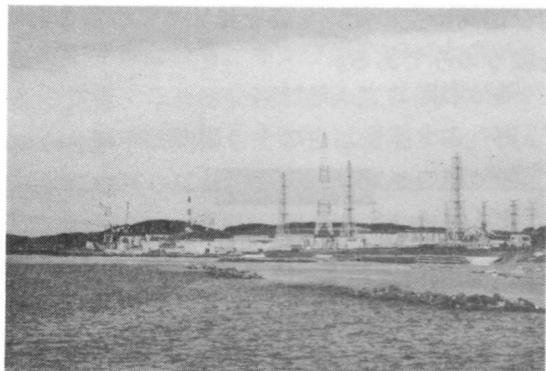
何頭かのカモシカに見送られ、参加者一同は、日尊の倉のブナ林を後にしました。

人工構造物で繁殖したと思われるハヤブサ

末崎 興助

柏崎市の北東部と刈羽村が接するあたりに東京電力柏崎刈羽原子力発電所があり、その敷地面積420haのうち120haは、クロマツに一部アカマツの交じった美しい林が広がっている。

このような松林に囲まれた環境の原発構内の鉄塔の下で、今年の5月と6月にハヤブサの幼鳥が保護された。幼鳥は2羽ともまだ十分に飛べる様子ではなく、また付近の環境か



柏崎刈羽原子力発電所全景

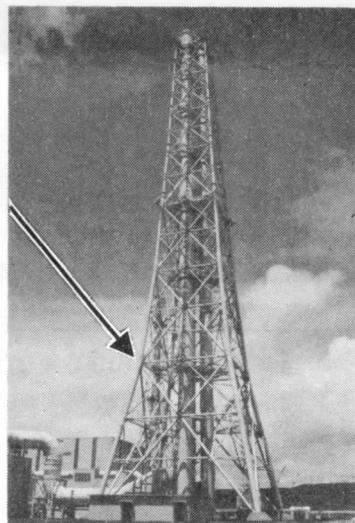
ら考えて、その鉄塔で繁殖が行なわれていたと考えられた。ハヤブサの人工構造物での繁殖は、まだ日本では極めて稀と思われるので今回支部報の紙面を借りて御報告したい。

1993年5月23日11時30分、原発1号機・2号機の集合排気筒の下でハヤブサの幼鳥1羽が、現場近くにいた(株)福田組の作業員の方に保護された。さっそくその幼鳥の收容先に駆付けて見ると、大きくしっかりした幼鳥で、所々にまだ白い産毛が残っており、孵化後約30日過ぎではないかと思われた。この幼鳥は翌日愛鳥センターへと送られた。続いて1993年6月1日午後4時45分と同じ場所で、ハヤブサの幼鳥1羽が落下してきた所を(株)鹿島建設の作業員の方に保護された。その際親鳥と思われる個体が鳴きながら急降下を

繰返していたとのことであった。巣に戻すような色々な努力が計られたが、危険なため断念した。私の所にその処置について相談があったので、とりあえず私の所に持って来るようをお願いしたところ、まもなく届けられた。

幼鳥は頭部にわずかに白い産毛を残しており、孵化後40日程で巣立ちに失敗したのではないかと思われた。鳥肉を与えたところ、なかなか食欲旺盛で、非常に元気であった。6月3日にやはり愛鳥センターに届けられた。

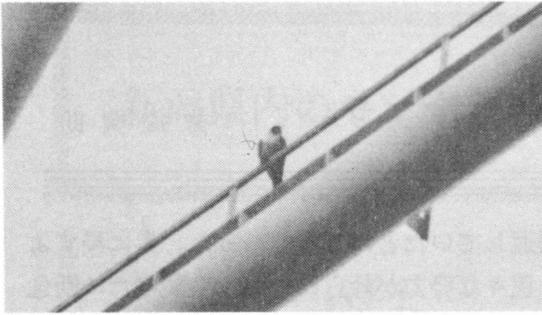
営巣場所と思われる箇所は原発構内の中央部より柏崎市街寄りの海岸から約500mの地点にある原発1号機・2号機の集合排気筒を支える鉄塔にあった。排気筒といってもその直径は1号機で4.2m、2号機で3.4mあり、それを支える鉄塔も高さ155mと巨大である。巣があったと思われる場所は、この鉄塔の下から約45mの位置にあり、4本ある外側の太い鉄柱と内側にある支柱の継目の部分であった。外側の支柱の内側に約80cm四方と思わ



矢印は
営巣したと
思われる
位置

原発1号機2号機の集合排気筒

写真提供：東京電力(株) 牧 助一氏



集合排気筒に止まるハヤブサの成鳥
写真提供：東京電力㈱ 牧 助一氏

れる鉄の板に囲まれたスペースがあり、海からの風や雨にも十分堪えられる構造になっている。この鉄塔は原発の立入制限区域内にあるうえ、地上45mと高い位置にあるため、人はまず近付かず、営巣場所としては好条件である。ハヤブサは巣立つ前に行うはばたきの練習の際に、丈夫な草や岩の角等につかまりながら巣から落ちるのを防ぐ行動をとるのが普通であると思われるが、今回の場合回りが鉄に囲まれていたため、つかまる所がなく、巣から落ちたのではないかと推測された。なお昨年原発構内では、ハヤブサ成鳥1羽が鉄塔にぶつかり、へい死体として拾われているほか、この鉄塔で餌を食べているハヤブサが



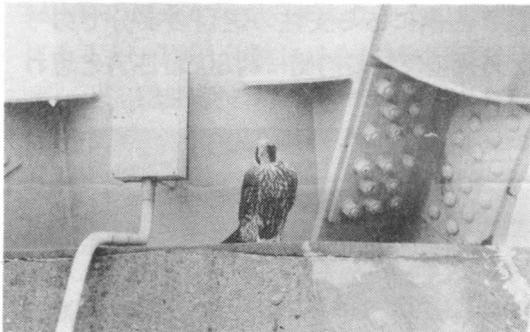
2回目に保護されたハヤブサの幼鳥

作業員の方に目撃されている。今後もこの場所で繁殖が行われるか注目されることである。

なお愛鳥センターに送られた幼鳥2羽は、それぞれ7月21日と23日に無事放鳥された。再び柏崎の空に元気な姿を見せてくれることを願うのみである。

掲 示 板

キノコ観察会 (雨天：スライド等に振替)
主催 新潟県愛鳥センター
期日 5年10月11日 (月) 午後0時半～4時
場所 愛鳥センター紫雲寺さえずりの里周辺
講師 日本細菌学会会員 酒井修一先生
持参するもの 筆記用具、紙袋又は手提カゴ
参加申込締切日 10月6日 (火)
申し込み方法 住所、氏名、年令、電話番号
をはがきか電話で申し込む
申込先 〒957-02 北蒲原郡紫雲寺町大字藤
塚浜字海老池 新潟県愛鳥センター
紫雲寺さえずりの里
電話 0254-41-4500
定員 先着50名



鉄塔から落ちたハヤブサの幼鳥
写真提供：東京電力㈱ 牧 助一氏

発 行 1993年9月1日 No.36
発行人 大 島 基 編 集 者 小林成光, 末崎 朗
日 本 野 鳥 の 会 新 潟 支 部
事 務 局 〒951 新潟市東中通1番町86番地28
☎025-229-2018 本間由紀子方 <振替>新潟1-6002